会津医療センターから こんにちは！

【２２】 漢方医学講座
准教授　鈴木　雅雄

『現代医学に鍼灸治療を』

鍼灸治療は普段あまりなじみがないと思います。実際には、何か特別なきっかけがあって鍼灸治療に出会うことが多いのではないでしょうか。私も小児喘息が酷く苦しんでいた11歳の時に初めて体験しました。祖母に薦められ、鍼灸治療をしている近所の病院に行きました。最初は怖かったのですが、鍼（はり）が無痛で驚いたのを、今でも覚えています。その後、半年くらいの通院で喘息発作が出なくなり、小児科の主治医も驚いていました。

鍼灸は飛鳥時代に日本に伝わり、長い年月を経て日本独自の医療化を遂げています。使う鍼は直径が0.16mmの極細のため、刺す際には痛みをほとんど感じません。

灸（きゅう）は、一般的に「お灸」という丁寧な表現で呼ばれています。これは庶民への医療が無かった時代に、弘法大師が庶民に広めたからだとされています。かつて灸は、親が子どもの病気を予防するために使っていましたが、子どもは灸が熱いので嫌がります。そこで親は、子どもがいたずらしたことを理由に灸を据えていたのです。「悪いことをすると灸を据える」という表現があります。これは、親が子どもの健康を願っての「愛情の灸」なのです。

鍼灸治療は鍼や灸を使って体に刺激を与えることで起こる生体反応を利用した治療です。鍼灸による刺激は脊髄から脳に入力され、様々な情報処理を経て治療効果を発揮します。「刺激から体を守る反応」を利用しているのです。最近では鍼灸刺激のメカニズムも解明されており、多様な症状に有効であることが研究で証明されています。

私の研究対象である慢性閉塞性肺疾患（COPD）は、鍼治療によって炎症が改善することが分かり、その結果、生命予後を予測するスコアーが改善しました。鍼灸治療は、主に機能的な障害に伴う症状に対して効果的です。一方、器質的な疾患に対しての効果は限定的ですが、現代医学に鍼灸治療を合わせることで、補完的な治療ができると考えられています。